

日本のキリスト教と民間巫者の救済方法における相違点についての一考察

A study of the differences in the methods of salvation between Christian and folk shamans in Japan.

佐々木 謙 一
Sasaki Kenichi

はじめに

筆者の研究テーマは、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」についての考察である。『日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」についての宗教学的考察』において、日本における「悪魔祓い」について調査し、その結果、東北地方の613のキリスト教会の中に26が「悪魔祓い」を行っていることを明らかにした。また、それを行う聖職者の話を分析することによって、その特徴と実態と構造を考察した。¹

このように、考察の結果、それまで明らかにされてこなかった、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」の特徴と実態と構造を明らかにしたのであるが、他の宗教における「悪魔祓い」（これ以降、救済方法とする）とそれを比較して論じるまでには至らなかった。過去の研究においても、そのような考察が行われることはなかった。

そこで、これらのことを整理することは、今後、日本のキリスト教「悪魔祓い」の研究を続けていく上で、非常に重要であると考え。なぜなら、他の宗教における救済方法と比較することで、キリスト教における「悪魔祓い」をまた違った角度から分析することができるからである。

このような課題を解決するために、今回の論文において、他の宗教における人々への救済方法を考察する。そのために、日本の民間巫者であるイタコ、カミサマ、ユタを取り上げ、それらが行う人々への救済の方法を分析する。そして、これらの考察分析の結果得た資料と日本のキリスト教「悪魔祓い」を比較し、その相違点を明らかにする。

第1章 救済という言葉の定義

本論文の中心となるは「救済」という言葉である。ここで、その「救済」という言葉を整理する。

一般的に「救済」という言葉は、宗教上の教義、あるいは、思想によって、人間が心理的、精神的に苦しい状況から解放されて、至福の状態になることを意味している。また、その救済の様相は

¹ 佐々木謙一（2023）『日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」についての宗教学的考察』（博士論文，東北大学）。

宗教によって異なっており、歴史上いろいろな形で表されてきたが、ある一定の共通の構造が認められる。そして、「救済」という言葉は広義の「救済」と狭義の「救済」に分けて考えられる。広義の「救済」とは、超合理的な方法を宗教者が使うことによって人間が病気や災難などの苦しい状況から脱却することで、通常の状態、もしくは、それ以上の状態になることを示している。また、この場合の「救済」は人間の力では制御できない状況に対して超合理的な対処がなされるときに初めて成立するとされる。これに対して狭義の「救済」とは、人間が病気や災難などによって生命を脅かされるような状態にあることを偶然に起こったこととして捉えるのではなく、社会や人間が起こした結果であると考え、それを克服することではじめて成立するといったことを示している。また、このような「救済」は主に仏教やキリスト教を代表とする世界宗教にみられ、全人類を対象とするとされている。このように、「救済」という言葉は広義で、また狭義で考えられるが、狭義の「救済」はさらにいくつかのタイプに分けて考えられる。そして、その中でも最も一般的なタイプの「救済」は、神や救い主といったものをたててその力によって悪や罪そして死などから解放を求めるといったものである。また、このようなタイプの「救済」は超人間的な存在を創り出し、それに従ったり、それに対して祈ったりすることによって救われるとされる。²

このように、「救済」という言葉は定義される。また、このようなことを踏まえて、本論文では、宗教者が人びとをその苦しみから解放する仕方、つまり、方法を「救済方法」として定義する。

第2章 日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」の方法

筆者は、『日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」についての宗教学的考察』において、東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」の特徴と実態と構造を明らかにしたことは先に述べた。ここで、重要となることは、それらを明らかにするためには、その方法を分析する必要があったということである。この方法は、4名のキリスト教聖職者のインタビューを詳細に分析したことによって、はじめて明らかにされたものである。そこで、本章では、日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」の方法について整理する。

そして、そのために図を示す。図1は、日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」を図示したものである。

² 同書 pp.18-19.

日本のキリスト教と民間巫者の救済方法における相違点についての一考察

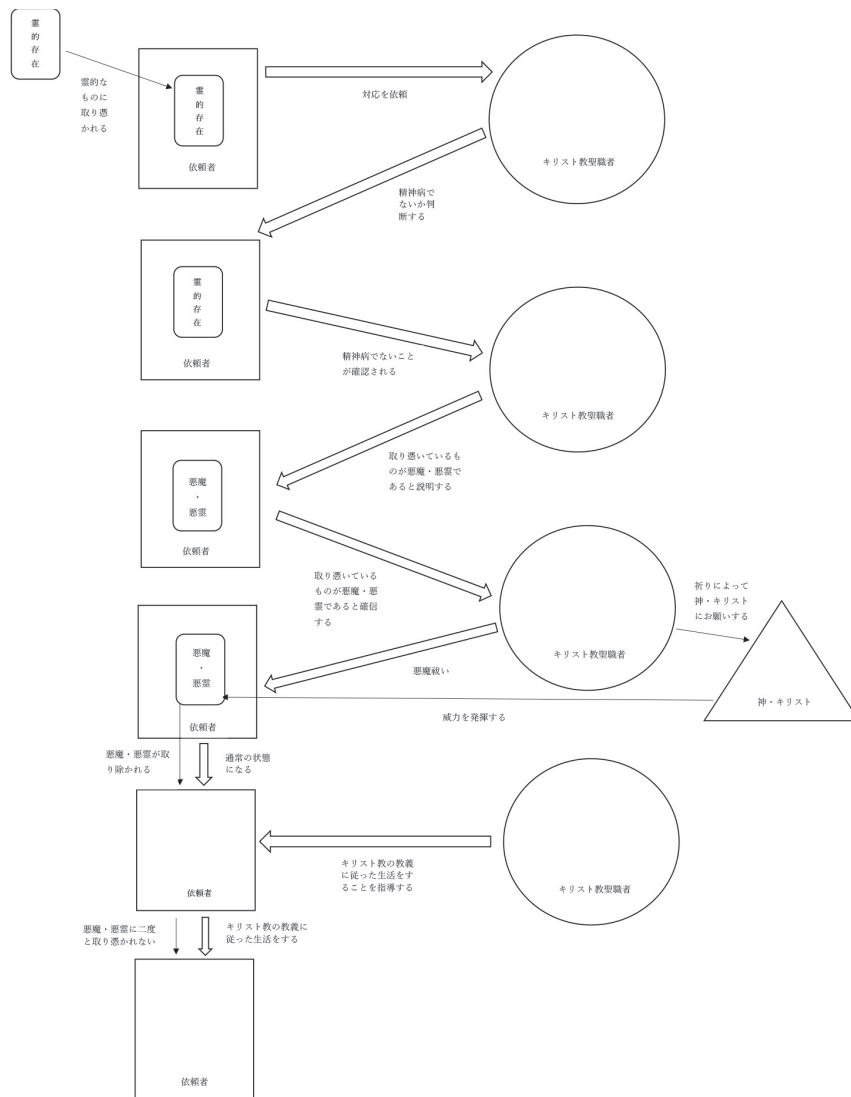


図1 東北地方におけるキリスト教の救済方法

日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」の方法は以下のようにまとめられる。

東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」は、「悪魔」や「悪霊」を実在するものとして信じるのが前提となる。また、それは聖書の記述を基に、常に自身の状態を整えることで行われる。また、依頼者に取り憑いているものが「悪魔」や「悪霊」であることを認識させる。東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」において、依頼者に取り憑いているものは「悪魔」や「悪霊」に限定される。そして、依頼者に神を信じる気持ちを持つようにさせる。また、依頼者に対して祈る。祈ったことによって「悪魔」や「悪霊」が現れた場合「悪魔祓い」を行う。それは、カトリック教会式³またはペンテコステ・カリスマ派式⁴で実施され、一般的には医者や医療機関と連携をとらない

³ 伝統的な形式に従って決められた「祈り」と言葉を唱えることによって行われる。

⁴ 聖書の言葉や信教、天使への祈りなどを組み入れることなく、伝統的また形式的な「祈り」ではない「祈り」によって行われる。

で、聖職者と依頼者の2人のみで行われる。また、聖職者が神に「悪魔」や「悪霊」を追い出してくれるように願う。その願いは祈りによって行われる。そして、「悪魔」や「悪霊」は神自身が追い出す。その際の牧師の立場と役割は、神が「悪魔」や「悪霊」を追い出す時に使われる「道具」として手助けをすることである。また、聖職者はその際に、イエス・キリストの名前を唱え、「悪魔」や「悪霊」を取り祓う。取り祓うことができるまで数時間かけて、また数日間にわたって、「悪魔祓い」の儀式を行う。そして、儀式によって、あるいは、その前後の依頼者とのやりとりによって、依頼者との間に信頼関係を結び、お互いの気持ちが一致したときに「悪魔」や「悪霊」を取り祓うことができる。そして、取り祓った後に、神を信じキリスト教の教義に従った生活をおくことを聖職者は依頼者に指導する。⁵

以上のようなことを踏まえて、日本における民間巫者の救済方法を考察し、それと比較分析することによって、違った角度から東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」を論じる。また、これ以降、日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」を日本のキリスト教「悪魔祓い」とする。

第3章 日本における民間巫者の救済方法

3-1 イタコ

3-1-1 イタコの実態

イタコは、主に青森県・秋田県の一部に存在し、現在ではその数は少なくなっている。そして、イタコは、生まれつき盲目であるか、幼少期に失明した者、また弱視の者がほとんどで、割合としては女性が多い。また、イタコの行う代表的な行為としては、「カミオロシ」や「ホトケオロシ」、そして、「まじない」や「ト占」などが挙げられる。これらの行為は、死霊などの何らかの霊的なものが憑依することによって行われる。このようなことから、イタコは、死霊など何らかの霊的なものと強く結びついている。

「カミオロシ」とは、異界に存在する霊、あるいは神と呼ばれる何ものかの存在を、特殊な方法によって呼び出し、それを自身の身体に取り入れることによって、その意志を語らせるといった行為である⁶。「ホトケオロシ」とは、死者であるこの世に存在していない先祖や人間の霊を呼び出し、それを自身の身体の中に取り入れることによって、意志を語らせるといった行為である。この「ホトケオロシ」は、「口寄せ」、あるいは、「口開き」ともいわれる。このように、イタコは、霊や神と呼ばれる何ものかの存在や死者の霊を自身の身体の中に取り入れるのである。⁷

また、イタコは霊的存在が身体に憑依して、第一人称で語ったり、行動したりする人物である⁸。そして、イタコは、霊的存在と接触する時にトランス状態になる。このトランス状態は、イタコに

⁵ 前掲書 佐々木謙一『日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」についての宗教学的考察』, pp.186-187.

⁶ 佐々木宏幹(1980)『シャーマニズム』中央公論社, pp.117-120.

⁷ 同書 pp.117-120.

⁸ 同書 p.184.

によって様々であり、統一した型はなく、トランスの有無、程度は地域により個人によって異なっている。⁹

このように、イタコは、超自然的な霊的存在と直接交流ができる巫者であることから、その意味で、憑霊型、しかも、霊媒型の典型的なシャマン¹⁰と捉えることができる¹¹。

3-1-2 イタコの救済方法

イタコの主たる行い、とくに、「ホトケオロシ」は、亡くなった方の霊を自身に降ろして、その真意を依頼者に伝えるといったことから、親族や近親者を亡くした方々の要望に応える役割を持つ。大切な人を亡くし、深い悲しみの中にいる依頼者にとって、イタコが行う「ホトケオロシ」は、悲しみを癒してくれる有難い行いである。このような「ホトケオロシ」は、イタコが生活する地域社会の中で行われないこともないが、恐山において、年に1回行われる、大祭のときに行われることで知られている。原英子¹²は以下のように述べている。

これらの寺院の行事とは別に、菩提寺の境内、総門脇の塀の近くではイタコたちが TENT を張って口寄せをしている。人々はイタコの TENT の前に列をつくり順番をまってホトケオロシをしてもらうのだが、総門が開いて間もなく TENT の前に並んだ人たちでも、場合によっては昼すぎまで何時間も待たされることがある。毎年来る常連客もいて、そうした人々から、かつては流行るイタコというのがいてそこは人が多くて待ち時間も長かったなどという話を聞く。¹³

このように、イタコは、恐山で死んだ人の霊を降ろすことで知られているが、本来の仕事は自分が生活する地域において、巡り歩きながら農作物の予想をしたり、健康や運勢の占いをしたり、助言をしたり、することである。イタコは、地域の人たちとコミュニケーションをとりながら、定期的に訪れることの出来る、いわば、「人生の相談役」の立場を担っている。このような「人生の相談役」としての役割が発揮されるのは、長く病気で苦しんでいる人に対して、医者が対応できなかった時などである。例えば、「頭痛」や「下痢」、「便秘」、「胃の不調」などの「慢性症状」に悩む患者は、最初は内科的な疾患と考えて病院を訪れるが、結局治らず、医師にも見放されイタコに頼る。こういったケースは、「霊の遍在」を信じるそのようなアニミズム濃厚な社会的文化的風土が、イタコなどの職能者を受け入れる素地となっているのであり、その意味において、イタコは地域社会において必要な医療活動の一環を担っていると言える。¹⁴

⁹ 吉田禎吾 (1995)「シャーマニズム」ギブニー, B. フランク(編)『ブリタニカ国際大百科事典』8, p.669.

¹⁰ シャーマニズムを文化現象の一つとして捉えようとしていることから、今日の学界一般の傾向として、シャーマンは霊的存在と直接交流・交通ができる力能をもつ人物とされている。

¹¹ 神徳昭甫 (2006)「恐山のイタコ：報告と考察一闇の中の開眼一」『富山大学人文学部紀要』45, pp.63-64.

¹² 社会学博士。岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科教授。

¹³ 原英子 (2012)「人々はイタコに何を求めるのか(1)：東日本大震災にみる恐山と三陸沿岸」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』14, p.55.

¹⁴ 前掲書 神徳昭甫「恐山のイタコ：報告と考察一闇の中の開眼一」, p.66.

このように、イタコが行う行為は、地域の人々にとって、また、近親者を亡くし、悲しい思いをしている人にとって、安心や癒しを与えてくれるものなのである。つまり、イタコの行為は人々を救済するために行われる。ここで、イタコが行う人々への救済方法をまとめるために図を示す。図2は、イタコの救済方法を図示したものである。

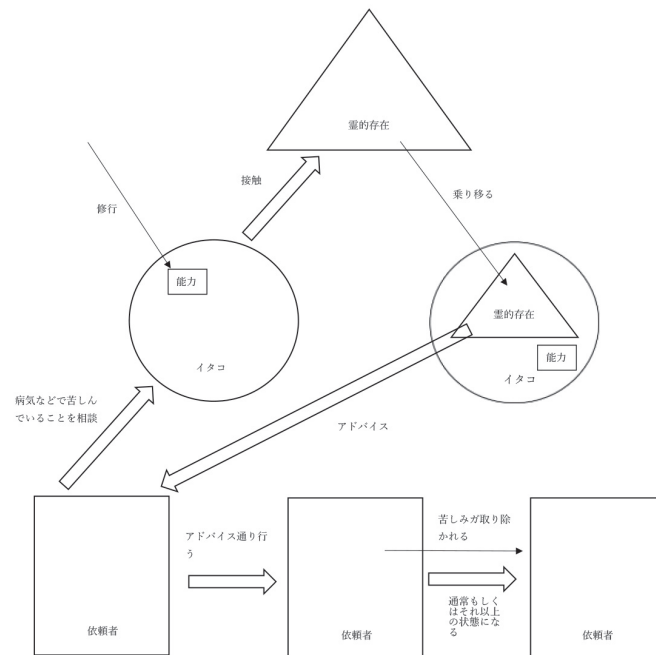


図2 イタコの救済方法

イタコは、超自然的な霊的存在と接触することができるようになるために修行をする。修行をしたことで、超自然的な霊的存在と接触できる能力を持つようになる。そして、医者などが対応できなかった依頼者が、イタコに病気などで苦しんでいることを相談する。そして、イタコが超自然的な霊的存在と接触する。その超自然的な霊的存在が、イタコの体の中に乗り移る。そこで、その超自然的な霊的存在が、イタコの口を借りて依頼者にアドバイスする。そして、アドバイスを受けた依頼者は、そのアドバイスの通りに行為を行う。すると、その病気などの苦しみの原因が取り除かれる。最終的に依頼者は、通常の状態、もしくはそれ以上の状態になる。このように、イタコの救済方法は示される。

3-2 カミサマ

3-2-1 カミサマの実態

カミサマは、イタコと同様に青森県・秋田県の一部に存在する巫者である。また、イタコが霊媒的であるのに対して、カミサマは予言的である。¹⁵ また、カミサマはイタコと異なり盲目ではない。

¹⁵ 前掲書 佐々木宏幹『シャーマニズム』, p.187.

そして、女性が多い。また、カミサマの多くは、生来虚弱体質であったり、結婚生活がうまくいかなかったり、家庭問題で苦しんで、カミサマに成った人物が多い。つまり、カミサマの多くは、恵まれない運命の持ち主が多い。そして、カミサマになるためには、過酷な修行を行わなければならない。また、その修行は、神社仏閣を訪ね、霊山に登って、滝に打たれ、堂社に寝泊まりしたりすることであり、約3年間は繰り返し行われる。

また、カミサマは、自身の身体の中に、神、あるいは、霊的な何かを取り入れ、その霊的な何かの意志を語るが、それにはいくつかのパターンがあり、以下のように示される。1. 祭壇に向かって太鼓をたたいているうちに神がのってくる。それから先は神の教えてくれる言葉に従って信者に答える。2. 信者への答えは神様から教えられるともなしに自然に浮かんでくる。病気などについては神や仏が教えてくれる。3. 病人が相談にくるときはその人がくる前に、自分の身体の具合が悪くなり、予知することができる。¹⁶

また、カミサマの役割は、人々の病気を治すなど、困っている人を助けたり、その人に降りかかった不幸や災難などを取り除くことである。そして、そのために厄災のお祓いをしたり、種々の人生問題の判断・予言などを行う。¹⁷ そして、それは「祈願」「予示」「判断」「処方」「口寄せ」の5つに分類することができる¹⁸。

これらの中で、「判断」と「処方」は、とくに重要な役割である。「判断」は、依頼者の具体的な相談に回答を与える役割である¹⁹。「処方」は、神や先祖、諸霊による「障り」への対処法であり、超自然的な言葉や儀礼を駆使して行われる²⁰。

3-2-2 カミサマの救済方法

神や先祖の霊が取り憑いたことによって、その人物に良くないことが起こっていると判断された場合、それを祓いたり、供養して慰めたりする方法が施される。これは、「処方」の中でも最も重要な方法である。また、それは「祓い」と「供養」という二通りの方法に分けられる。²¹

「祓い」とは、ある人物に取り憑いている神や先祖の霊を祓うという方法である。これには、「修験系の九字を切る修法」²²をはじめ、それぞれに独特な「祓い」の方法があるが、それらはすべて、不幸の原因とされる「不全なる関係性」²³を、超越的な法や神仏の力を借りて、強制的に切断し、排除することを目的としている。²⁴

¹⁶ 同書 pp.187-188.

¹⁷ 同書 pp.117-120.

¹⁸ 池上良正 (1997)『民間巫者信仰の宗教学的的研究-青森・沖縄両県を中心に-』(博士論文, 筑波大学) p.80.

¹⁹ 同書 p.80-81.

²⁰ 池上良正(1992)『民俗宗教と救い-津軽・沖縄の民間巫者-』淡交社, pp.76-77.

²¹ 同書 p.80-81.

²² 災難を除くために臨・兵・闘・者・皆・陳・列・在・前の九字とそれに相応する印を手に結び、つぎに刀印を結んで、横・縦の順に四縦五横の直線を空中に画する呪法。(福田亮成(編)2000『真言宗小事典』法蔵館。)

²³ 神や先祖の霊が取り憑いたことにより、その人物に良くないことが起こっていると判断されること。

²⁴ 前掲書 池上良正 (1997)『民間巫者信仰の宗教学的的研究-青森・沖縄両県を中心に-』, pp.260-261.

また、「供養」とは、ある人物に取り憑いている神や先祖の霊を慰めるという方法である。その中には「行」や「流し供養」、「お詫びの祈祷」などの仕方がある。

「行」は修行をすることであり、カミサマから依頼者に対して、勧められる行為である。この「行」を行うことによって、その人物に取り憑いている霊的な何者かの霊を慰め、供養し、依頼者自らに起こる不幸や災難の原因を取り除くことができる。根深誠²⁵は以下のように述べている。

工藤さんは「行」をすることで悪霊を跳ね返し、自らを清めるのだ。深夜二時に起きて、部屋の四隅に御神水を指先で軽く撒いてから、三時までに種市へ着くようにして車を走らせた。到着後、御神水のある楔場で祈祷をささげ、バケツで頭から御神水を五杯かぶる。午前四時には終了する。これを二十一日間つづけた。「最後の日、『行』を済ませてから、おかげ様で『行』を終わりました、と一人で挨拶した。そしたら、たまげてしまった。真っ黒な丸い塊が、私の足元から空を切って飛んで行った。恐ろしさのあまり、震えあがって、毛髪が立ってしまった。」これは、経験した人でないとわからない。身体から抜け出た黒い塊が悪霊の正体だった。²⁶

このように、カミサマは依頼者に「行」を行うことを勧めるのだが、重要なことは、この「行」の方法を祈祷することによって、超自然的な霊的存在から示されるということである。カミサマは、超自然的な霊的存在と接触することによって、「行」の方法を教えてもらい、その方法を依頼者に伝える。伝えられた依頼者は、これを実行することによって、不幸や災難、そして病気の原因である取り憑いている霊的な何者かを祓うことが出来るのである。

また、「流し供養」とは、「先祖の因縁・罪障」や「稲荷の障り」を祓う儀礼であり、稲荷への供物を作りそれを海に流したり、稲荷の像を作りそれを川に流すといった行為であり、このことによって「稲荷の障り」が祓われる²⁷。

また、「お詫びの祈祷」とは、神前の前で稲荷に対して、依頼者にまつわる「先祖の因縁・罪障」を祓ったり、先祖や霊的な何者かを供養することである。依頼者の病気は、「先祖・母親の因縁・罪障」と結び付けられ、それは単に個人の病気として孤立化されず、家、また家族の問題として提示されている。²⁸

このように、カミサマは、病気の原因が何か霊的なものに取り憑かれていることによると判断した場合、祈祷したり、特別な呪文を唱えることによって、それを祓ったり、供養したりして、病気を治す。つまり、カミサマによる「救済」とは、これら「因縁罪障」などとして判断された、神や先祖、そして諸霊との関係を修復することである。²⁹

²⁵ 1947年青森県弘前市生まれ。ルポライター、登山家。

²⁶ 根深誠(2018)『カミサマをたずねて―津軽赤倉霊場の永助様』中央公論新社, p.175.

²⁷ 川村邦光(1997)『憑依の視座 巫女の民俗学Ⅱ』青弓社, p.180.

²⁸ 同書 p.181.

²⁹ 前掲書 池上良正(1992)『民俗宗教と救い―津軽・沖縄の民間巫者―』, p.138.

3-3 ユタ

3-3-1 ユタの実態

ユタは、自身の意志とは関係なく、ある日突然、神あるいは何ものかによって、示されて、ユタに成る。そこには自身の意志も計画もない。ユタの候補者は入巫の初期において、「カミダーリィ」（一般の巫病）といわれる、神、または、神の使者がユタになることを勧める幻覚をみる。そして、それらに選ばれると病気になるが、この勧めを受け入れると病気が治るとされている。しかし、受け入れないと、神、または、神の使者が毎晩夢枕に立って責めたてるために、ますます病気は重くなる。いくら抵抗したとしても、このようなことが繰り返されることによって、ついに、ユタの候補者は諦めてユタに成ることを決心する。³⁰

そして、ユタとなった人間は、人々のために、神、あるいは、超自然的な霊的存在の意志を伝えるという役割を持つ。また、その方法は、その啓示を得て神がかりに入り、トランス状態になることによって、超自然的な霊的存在と接触し、その意志を聞き、人々に助言を行うという形をとる。³¹

これは「判断」と呼ばれる方法であるが、ユタはことあるごとに神の知らせに基づいて、人々に神の意志を助言しなければならない。そして、このような「判断」がよく当たると評判になることによって、職業として成立していく。最終的には、職業として成立することによって、初めてユタとして認められるのである。

3-3-2 ユタの救済方法

先に、カミサマの救済方法では、「処方」における「祓い」と「供養」が、救済の世界を構成しているということを論じた。そして、このような救済方法は、沖縄におけるユタ的宗教者の救済世界においても、ほぼ同じかたちで見出すことが出来る³²。

沖縄のユタの場合においても、カミサマの場合と同じように、先祖と子孫の関係は、理論を超えた宿命的なものと考えられ、継承を邪魔されることによって、破綻すると考えられている。ユタは、このような非合理的で神秘的でありながら、なおかつ機械的で、自動的な原理を用いて、災いや不幸の原因を説明する。³³

また、個人や家族の問題は、単独のこととして扱われるのではなく、さまざまな関係性の中に結び付けられる。池上は以下のように述べている。

いいかえれば、ここでは個人や家族の災いの除去といった問題が、切り離された単独の事象として扱われるのではなく、当人の生まれ、死者との関係、天体の運行、潮の流れ、時間と方位など、さまざまな象徴体系の複合のなかに定位されるのである。沖縄の伝統宗教を支えるコス

³⁰ 桜井徳太郎（1978）「シャーマニズム研究の諸問題」桜井徳太郎（編）『シャーマニズムの世界』春秋社、p.33.

³¹ 桜井徳太郎（2000）「現代シャーマニズムの行方」桜井徳太郎（編）『シャーマニズムとその周辺』第一書房、p.17.

³² 前掲書 池上良正『民俗宗教と救いー津軽・沖縄の民間巫者ー』、p.139.

³³ 同書 pp.142-143.

モロジーは、まさにこうした宇宙＝生命的で、複合的で、全体的な聖性のなかで理解されなければならない。³⁴

このように、個人と家族にまつわる関係性は、自分ではどうすることも出来ない運命的なものに結び付けられている。しかし、こうした関係性の中に、先祖とお互いの苦しみを共感し合い、分かち合うということが存在している。このようなことは、カミサマにおいても同様である。³⁵

また、ユタの主たる役割は、祭壇の前で行われる「判示」(ハンジ)である。依頼者は、この「判示」に基づいて、「シジタグシ」(祖先の系譜の修正)をするのが一般的である。沖縄の伝統的な考えの中に、祖先との系譜関係を誤り、それに基づいて祖先祭祀を行ってしまうと、祖先が子孫に災難や異常な体験をもたらす、という考えがある。そして、祖先が子孫に災難や異常な体験をもたらすことを「シラシ」(知らせ)といい、人びとは、この「シラシ」を経験して、その原因を解決するために、ユタに依頼するのである。³⁶

このように、ユタによって判断された不幸や災難、そして病気などの原因は、先祖からのシラシを修正することによって解決できる。池上は以下のように述べている。

Mは「チャッチウシクミ(嫡子の押し込め)がありますね」と切り出した。Kの父親の最初の妻は、子供を身籠もったまま家を出て別の男性と再婚した。父親は2番目の妻との間にできたKを長男として育てた。K自身は結婚して子供もできたが、やはり夫婦仲がうまくいかず、妻は長男を連れて出ていった。妻はしばらく別の男性と同棲したが、その男性とも別れて再びKのもとへ戻ってきた。Mによれば、ここには二代続けての嫡子の排除があるという。すべての災いの源は、先代のチャッチウシクミだという。押し込められた霊(本来は長男を継ぐべきであった先妻の子)が障っているのに、だれもカントレナイ(感じとってやれない)から、災いが起こるのだという。³⁷

また、沖縄における伝統的村落には、「霊威的次元」の力や意味が顕現する「窓」が存在すると考えられている。ユタは、これらの「窓」を通して、「霊威的次元」の力や意味を引き出し依頼者を救済する。このように、ユタはさまざまな技法を駆使することによって人々を救済するのだが、とくに、先祖の祀り方に問題があると判断した場合、依頼者に特定の拝所の巡拝を指示したり、落としたとされるマブイ、またはマブヤーと呼ばれる靈魂を拾い直させる。³⁸

このように、ユタによって行われる救済は、カミサマによって行われる救済とほぼ同様な方法で

³⁴ 前掲書 池上良正『民俗宗教と救いー津軽・沖縄の民間巫者ー』, p.145.

³⁵ 同書 p.147.

³⁶ 片本恵利(2009)「沖縄の『癒しのシステム』におけるユタの機能に関する一考察:ユタのハンジと巡礼の体験を通じて」『沖縄国際大学人間福祉研究』第7巻第1号, p.76.

³⁷ 前掲書 池上良正『民間巫者信仰の宗教学的的研究-青森・沖縄両県を中心にー』, p.319.

³⁸ 同書 pp.348-349.

行われる。東北地方と沖縄地方という地域的な違いがあるにせよ、その救済の方法は、依頼者に先祖などの意志や知らせを伝え、依頼者自身が、それらとの関係性を修復することによって、解決するといったものである。

ここで、ユタの救済方法をまとめるために図を示す。図4は、ユタの救済方法を図示したものである。

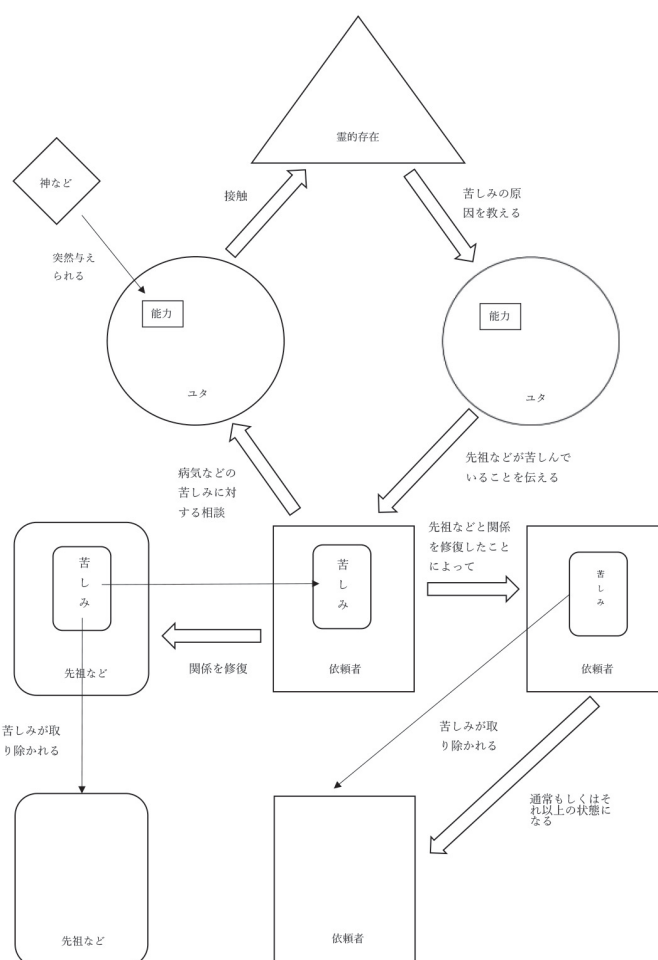


図4 ユタの救済方法

ユタの救済方法は、病氣などの苦しみを持つ人間がユタに相談することから始まる。相談を受けたユタは、超自然的な霊的存在と接触することで、その原因が「先祖」などが苦しんでいることによるということを教えられる。そして、その原因が判明したことによって、依頼者だけでなく、「先祖」なども苦しみのなかにあるということを知ることになる。そして、依頼者の苦しみを取り除くためには、「先祖」などを苦しみから解放してあげなければならないと判断する。そして、そのことをユタが依頼者に告げることによって、依頼者は、自身の苦しみの原因が、「先祖」などの痛みでもあるということを知り、それを取り除いてあげることによって、自身の痛みを取り除くことが出来ると判断する。

そして、依頼者は、「先祖」などが苦しんでいる原因を取り除くための行為を行う。それは、関係を修復することで行われる。そして、「先祖」などと関係を修復し、苦しみを取り除いてあげたことによって、依頼者を苦しめていた原因は取り除かれる。そして、依頼者は元の通常の状態、もしくは、それ以上の状態になる。このように、ユタの救済方法は、カミサマの救済方法とほぼ同様に示される。

また、カミサマとユタは、ほぼ同様な救済方法を持っているが、相違点がないわけではない。その相違点は、カミサマにおいては、「修行」が行われるのに対して、ユタにおいては、その「修行」はほとんど見られないということである。その理由として、本土において、仏教的な伝統がかなり影響を及ぼしているのに対して、沖縄においては、仏教的な伝統がそれほど浸透しなかったということが挙げられる。³⁹

以上、日本における民間巫者である、イタコ、カミサマ、ユタ、の救済方法を論じた。

結論

ここまで述べてきたことを踏まえて、日本のキリスト教と民間巫者および伝統的宗教における救済方法の相違点を一覧表にまとめる。

表1 日本のキリスト教聖職者と民間巫者との救済方法の相違点一覧表

	民間巫者			キリスト教聖職者
	イタコ	カミサマ	ユタ	
宗教者は修行を行う	○	○		
宗教者は特別な能力を持つ	○	○	○	
宗教者は超自然的な霊的存在と接触できる能力を持つ	○	○	○	
依頼者が相談する	○	○	○	○
宗教者は超自然的な霊的存在と接触する	○	○	○	
超自然的な霊的存在が宗教者の体の中に入る	○			
超自然的な霊的存在に宗教者は病気などの原因を教えてもらう		○	○	
宗教者は特別な能力によって依頼者から直接病気などの原因を取り除く				
宗教者は祈ることで神の力によって依頼者から直接病気などの原因を取り除く				○
超自然的な霊的存在が直接依頼者にアドバイスする	○			
超自然的な霊的存在の代わりに宗教者が依頼者にアドバイスする		○	○	
依頼者は宗教者のアドバイスの通りに行為を行う	○	○	○	
先祖などの苦しみを克服する	○	○	○	
依頼者から病気や苦しみの原因が取り除かれる	○	○	○	○
依頼者は通常の状態もしくはそれ以上の状態になる	○	○	○	○

日本の民間巫者とキリスト教聖職者の救済方法の違いは以下のようにまとめられる。

- ・民間巫者は特別な能力を持つが、キリスト教聖職者は特別な能力を持たない。
- ・民間巫者は超自然的な霊的存在と接触するが、キリスト教聖職者は接触しない。
- ・民間巫者は依頼者に神や先祖また死者などの霊的な存在の言葉を与えるが、キリスト教聖職

³⁹ 前掲書 池上良正『民俗宗教と救いー津軽・沖縄の民間巫者ー』, p.154.

者はそのようなことはしない。

- ・民間巫者は神仏の力を借りることによって、自身が不幸の原因とされるものを排除するが、キリスト教聖職者は自身が行うのではなく、神が直接追い出す手助けをする。

イタコは、自身の持つ特別な能力によって、自身の身体の中に死者の霊を取り入れ、その真意を聞き、依頼者に助言をする。また、カミサマとユタは、自身の持つ特別な能力によって、神や仏と呼ばれる霊的な何者かと接触し、それらから授かったとされる秘法を依頼者に伝える。このように、日本の民間巫者は自身の持つ特別な能力によって、死者の霊や超自然的な存在である霊的な存在と接触し、その意思を伝えることによって、苦しんでいる人を救済する。つまり、民間巫者の救済方法の特徴は、自身が特別な能力を持っているということと、霊的な存在の意志を相手に伝え、行為を実行させることにある。一方、キリスト教聖職者は、特別な能力を持つことはなく、神の意志を相手に伝えることはしない。神に祈り願うことによって、神が直接、「悪魔」や「悪霊」を追い出すといった救済方法をとる。

このようなことから、民間巫者とキリスト教聖職者の救済方法の最大の相違点が、宗教者が特別な能力を持っているか否かということ、また、超自然的な霊的存在と接触し、その意志を伝え行為を実行させるか否かにあるということがわかる。

民間巫者は修行することによって能力を得ることで、はじめて超自然的な存在に接触できると考える。このことを分析すると、民間巫者にとって、自身が特別な能力を持つことこそが、何よりも重要となる。つまり、この救済の主体は、民間巫者自身の特別な能力にある。しかし、キリスト教の場合は、そのような能力は必要としない。重要となるのは、自身の神への信仰のみである。このようなことから、民間巫者とキリスト教聖職者の救済方法の違いは、宗教者自体の在り方にあると筆者は考える。つまり、それは宗教者の「能力」と「信仰」という言葉で表される。

また、民間巫者の場合、神や超自然的な霊的存在は助言をするだけであり、直接、その人間や苦しみの原因に作用することはない。一方、キリスト教の場合は、神が直接、その人間や苦しみの原因に作用し、苦しみの原因を取り除く。

このように、民間巫者とキリスト教聖職者の救済方法は異なっているのだが、これらの違いこそが宗教そのものの違いからきていると筆者は考える。キリスト教がこのような救済を行う根底には、唯一全能の神という概念がある。キリスト教は、神にはできないことはないと考えことから、人間、とくに、聖職者がその救済に関与する余地はないのである。その主体は神自身であり、人間、とくに、聖職者は祈り願うだけの存在であるとされる。

結論として、民間巫者とキリスト教聖職者の救済方法の違いは、宗教者自身が特別な能力を持つことへの考え方と、神や超自然的な存在の救済の仕方についての考え方にあると筆者は考える。

おわりに

冒頭でも述べたように、筆者の研究テーマは、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」についての考察である。『日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」についての宗教学的考察』では、日本においてキリスト教「悪魔祓い」が行われていることを明らかにした。また、その特徴と実態と構造を考察した。しかし、このような考察は、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」のそれについて明らかにしたものの、他の宗教における救済方法とそれを比較して論じるまでには至らなかった。このことは、前述のとおりである。過去の研究においても、そのような研究はほとんど行われていない。また、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」を研究していくうえで、これらのことを整理することは非常に重要であった。

今回の考察では、このような課題を解決するために、日本における民間巫者の救済方法を考察し、それがどのように行われるのかを整理した。その結果、それぞれの宗教は様々な方法を構築し、駆使しながら人々への救済を行っていることが明らかになった。

これらの宗教は、形式こそ違いがあるが、病気などの苦しみを持つ人びとを「救済」するために、それを行うということにおいて共通している。また、日本における民間巫者は、地域の人びとにとって身近な存在であり、生活していくうえで、心の支え的な存在となっている。困ったときや判断を仰ぐときに、民間巫者は人びとにとって、心の支えとなっており、とくに、医者が対応できなかった時などには、その存在は、有難いものとなっている。東北地方と沖縄地方との違いがあるにせよ、彼らは地域と深い関係を持つ宗教者である。そして、その救済は、宗教者が、超自然的な霊的存在と接触できる能力を得ることから始まって、病気などの苦しみを持つ依頼者が、元の通常の状態、あるいは、それ以上の状態になるまで一貫して行われる。一方、キリスト教聖職者は、特別な能力を持つことはなく、神の意志を相手に伝えることせず、神に祈り願うことによって、神が直接、「悪魔」や「悪霊」を追い出してもらうといった救済方法をとる。

今回の考察において、日本の民間巫者とキリスト教聖職者が、全く異なる救済方法を行うということが明らかになった。しかし、このように、異なる救済方法によって、それぞれの宗教は、苦しんでいる人を救済しているのだが、この日本においては、キリスト教の救済方法は、独特なのではないかと筆者は考える。そして、そのことを確かめるために、さらに日本の宗教の救済方法を考察する必要がある。このことを踏まえて、次は日本の伝統的宗教の宗教者が行う救済の方法を考察し、キリスト教との違いについて論じてみたい。

参考文献

- 青野太潮（2002）「救済」大貫隆（編）『岩波キリスト教辞典』岩波書店。
秋山さと子（1988）「トランス」加藤周一（編）『世界大百科事典』20平凡社：466。
池上良正（1987）『津軽のカミサマ救いの構造をたずねて』どうぶつ社。
——（1992）『民俗宗教と救い—津軽・沖縄の民間巫者—』淡交社。

- (1997)『民間巫者信仰の宗教学的的研究』(博士論文, 筑波大学).
- (2003)『死者の救済史供養と憑依の宗教学』角川書店.
- 大貫隆他(編)(2002)『岩波キリスト教辞典』岩波書店.
- 片本恵利(2006)『『ノロ』と『ユタ』の祈りに関する一考察』『沖縄国際大学総合学術研203究紀要』第10巻第1号: 45-64.
- (2009)「沖縄の「癒しのシステム」におけるユタの機能に関する一考察: ユタのハンジと巡礼の体験を通じて」『沖縄国際大学人間福祉研究』第7巻第1号: 75-99.
- 金本伊津子(2001)「津軽・下北地方における生者と死者の癒しのコミュニケーション: 死者の語りと冥婚(1)」『平安女学院大学研究年報』1: 73-82.
- 川上新二(2015)「沖縄・伊良部島佐良浜の宗教職能者: 祭司とシャーマンとの関係について」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』15: 15-24.
- 川端亮(1988)「宗教的職能者における霊能力と家族の影響」『年報人間科学』第9号: 65-81.
- 川村邦光(1997)『憑依の視座巫女の民俗学Ⅱ』青弓社.
- 熊谷輝(1983)「津軽地方における『カミサマ』と精神医療」『弘前医学』35: 421-440.
- 神徳昭甫(2006)「恐山のイタコ: 報告と考察—闇の中の開眼—」『富山大学人文学部紀要』45: 55-70.
- 斎藤英喜(2009)「シャーマニズムとは何か」『シャーマニズムの文化学—日本文化の隠れた水脈』森話社: 14-22.
- 桜井徳太郎(1978)「シャーマニズム研究の諸問題」桜井徳太郎(編)『シャーマニズムの世界』春秋社: 1-45.
- (2000)「現代シャーマニズムの行方」桜井徳太郎(編)『シャーマニズムとその周辺』第一書房: 1-43.
- 佐々木宏幹(1980)『シャーマニズム』中央公論社.
- (1988)「シャーマニズム」加藤周一(編)『世界大百科事典』20平凡社: 1315.
- 佐々木伸一(1988)「シャーマンの類型: 日本および周辺の地域に関して」『族: ヤカラ』7 筑波大学歴史人類学系民族学研究室: 1-46.
- 佐藤時次郎(2006)「民間信仰の功績」日本精神衛生学会誌『こころの健康』第21巻第1号金剛出版8-14.
- 高松敬吉(1994)「シャーマニズムの比較研究: 日本・韓国・中国を中心に」『比較民俗研究』9: 3-26.
- 高見寛孝(2014)『巫女・シャーマンと神道文化』岩田書院.
- 谷口貢(1998)「祓い」佐々木宏幹他(監修)『日本民俗宗教辞典』東京堂出版: 468.
- 田丸徳善(1985)「救済」相賀徹夫(編)『日本大百科全書』6 小学館: 723.
- 根深誠(2018)『カミサマをたずねて—津軽赤倉霊場の永助様』中央公論新社.
- 原英子(2012)「人々はイタコに何を求めるのか(1): 東日本大震災にみる恐山と三陸沿岸」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』14: 55-59.
- 平山眞(2012)『東北シャーマニズムにおけるコミュニケーション行為の諸相』(博士論文, 東洋大学).
- 福寛美(2017)「媒介者をどのようにとらえるか」『宗教史学論叢21霊と交流する人びと上巻』リトン.
- 宮崎正美(2002)「悪魔祓い」大貫隆他(編)『岩波キリスト教辞典』岩波書店: 17.